

~~~~~  
研 究  
~~~~~

## 児童養護施設で生活する子どもの気質研究

—— 3～7歳児を中心として ——

戸松 玲子<sup>1)</sup> , 岡田 由香(高岸)<sup>2)</sup>  
稲垣 由子<sup>1)3)4)</sup> , 小林 登<sup>4)</sup>

### 〔論文要旨〕

児童養護施設入所児童の気質調査を行った。その結果、児童養護施設入所児童は措置理由の虐待・非虐待や入所期間の長さに関係なく、Easy childが少なく、Slow-To-Warm-Up Childが多い傾向にあった。また、気質カテゴリーのApproach or Withdrawal, Adaptability, Intensity of Reaction, Attention Span and Persistence, Distractibility, Threshold of Responsivenessでは、標準値との間に統計的な有意差が認められ、児童養護施設入所児童には気質特徴があることが明らかとなった。

**Key words :** 児童養護施設入所児童, 気質, Slow-To-Warm-Up Child, 児童虐待

### I. はじめに

近年、児童養護施設入所児童の処遇は歴史的変貌を遂げ、被虐待児の入所が増加の傾向にあり、児童養護施設で養育される子どもの発達促進と心のケアが重要とされ、処遇に際するより高い専門性・より深い子どもへの理解が必要とされている<sup>1)2)</sup>。児童養護施設は一般の家庭とは異なり、集団で生活を営む場である。その現状は子どもの成長・発達の過程において、万全な養育環境であるとは言いがたい。それゆえ、児童養護施設入所児童の成長・発達の過程には、児童養護施設入所前後を含めた育成環境に問題があるとされることが多く、環境要因から子どもの成長・発達を理解しがちである。

環境要因から子どもの成長・発達を支援していくことも重要である。しかし、子どもと直接的にかかわりながら成長・発達を支援していく

には、その子の個性のみならず、社会場面における個人差を理解・考慮しなければならない。つまり、一人ひとりの子どもの個性および、個人差を理解・考慮した環境へのアプローチが、子どもの健やかな成長・発達を支援していく上で重要である。

環境が子どもに及ぼす影響だけでなく、乳幼児期の気質の特徴が環境に影響していることに注目し着手された臨床研究の一つとして、アメリカの児童精神科医であるThomas & Chessらの行った“New York Longitudinal Study (NYLS)”とよばれる子どもの気質研究がある<sup>3)4)</sup>。これは、今日における子どもの気質研究の基礎となっているものである。

Thomas & Chessらは、子どもの臨床的問題には、環境要因だけでは説明不可能であるということから、1956年より、約130名の子どもを対象に、生後2～3か月のときより、約30年に

A Study of Child Temperament in Children's Home  
— Children aged 3 to 7 Years Old —

[1555]

受付 03. 8.18

Reiko TOMATSU, Yuka OKADA (TAKAGISHI), Yuka INAGAKI, Noboru KOBAYASHI

採用 04.10.28

1) 甲南女子大学大学院総合人間科学研究科博士後期課程 (大学院生) 2) 神戸大学発達科学部 (小児科医師)

3) 甲南女子大学人間科学部 (小児科医師) 4) 甲南女子大学国際子ども学研究センター (小児科医師)

別刷請求先: 戸松 玲子 甲南女子大学 〒658-0001 兵庫県神戸市東灘区森北町6-2-23

Tel/Fax : 078-413-3093

上にわたり、子どもがどのような場面で「いかに (How) 行動するか」について、養育者と定期的に面接を行い、子どもの行動の個性についての研究を重ね<sup>5)</sup>、子どもの気質が人の「適応」にどのような影響を及ぼすかということを追跡調査し、子どもの気質と養育環境との「適合のよさ (goodness of fit)」, 「適合の悪さ (poorness of fit)」という概念を提起した<sup>6)</sup>。「適合のよさ」は養育者やその他の大人の期待や要請が子どもの気質や能力などの特徴と互いに相いれるものであるときにみられると考えられ、この場合子どもの健全な発達が期待され、「適合の悪さ」は養育者などからの期待や要請が過度なものであったり子どもの気質や能力などの特徴と相いれないものであるときに生じ、子どもは強いストレスのもとにおかれて健全な発達が妨げられるというのである<sup>7)</sup>。

本研究では、子ども自身をより深く理解し、施設職員が日々の生活の中で子どもとの関わりに役立てることを目的とし、「子どもの気質」という観点から児童養護施設入所児童の調査を行い、その結果を施設に返ししながら研究を進めている。今回、その研究の一部として、1) 児童養護施設入所児童の気質特徴と気質類型について、2) 措置理由別による気質特徴と気質類型について、3) 入所期間別による気質特徴と気質類型についての知見を得たので報告する。

## II. 対象と方法

平成12年11月12日から11月31日にかけて、兵庫県下の児童養護施設14ヶ所 (神戸市は除く) に入所している3～7歳児 (月齢36～95か月) の児童247名 (男児133名, 女児114名) を対象として、気質調査を行った。

方法は、兵庫県下の児童養護施設の職員を対象に気質に関する事前研修会を開催して、子どもの気質についての知識を提供した。その後、Behavioral Style Questionnaire (McDevitt & Carey, 1978) を庄司らが日本語に翻訳した「幼児行動様式質問紙」を各施設に配布した。質問紙の記入は、対象児童の担当職員を中心として行われ、郵送にて回収した。回答項目を、各カテゴリー別 (Activity level・Rhythmicity・Approach or Withdrawal・Adaptability・In-

tensity of Reaction・Quality of Mood・Attention Span and Persistence・Distractibility・Threshold of Responsiveness, 表1参照<sup>8)</sup>) (以下 Activity・Rhythm・App/With・Adapt・Intens・Mood・Persist・Distract・Threshと表す) に集計処理を行い、気質類型の分類 (Easy child・Difficult child・Slow-To-Warm-Up child・Intermediate-high child・Intermediate-low child, 表2参照<sup>9)</sup>) (以下 Easy・Diff・STWU・I-H・I-Lと表す) を行った後、各気質特徴および、気質類型の分析を行った。

統計処理には、各カテゴリー間における標準値と対象児童間ではz検定、措置理由別および、入所期間別による各カテゴリー間ではt検定、気質類型間では $\chi^2$ 検定を用いた。

児童養護施設入所の措置理由別 (虐待・非虐待) の分類は、子どもセンターから児童養護施設への措置理由書によるものである。

個々の子どもの分析結果を各施設に報告し、日々の子どもののかかわりに役立てるために、担当職員との検討会を開催した。

## III. 結 果

### 1) 回収率および調査対象の概要

調査児童247名すべてから回答が得られ、回収率は100%であった。そのうち、記入が不適当な2名を除き、245名 (男児133名, 女児112名) を調査対象とした。調査対象の平均年齢は、5.6 $\pm$ 1.5歳 (67.0 $\pm$ 17.8か月) で、入所期間は0～68か月、平均入所期間24.1 $\pm$ 17.9か月であった。

### 2) 児童養護施設入所児童の気質特徴と気質類型について

児童養護施設入所児童の各カテゴリー値と標準値との比較を行ったところ、「App/With」、「Adapt」、「Intens」、「Persist」、「Distract」、「Thresh」の6カテゴリーに統計的な有意差を認めた (表3)。

気質類型は、「I-L」が最も多く、次いで「STWU」、「Easy」、「I-H」、「Diff」の順で、「I-L」と「STWU」とで6割を占めていた (表4)。

### 3) 措置理由別による気質特徴と気質類型について

措置理由に虐待と記された例は、245例中60

表1 気質カテゴリー (佐藤, 1985)

Activity level	子どもの行動に運動成分がどの程度見られるかで、例えば、眠っている間も動く、おもつを取り替える間も動くなどは活動水準が高いことである。(1: 活動性が低い, 6: 活動性が高い)
Rhythmicity	睡眠, 食事, 排泄, 動きと休息のリズムなどのように、反復される機能の規則正しさの程度。毎日ほとんど同じ時間に眠くなるようなら規則的である。(1: 規則的, 6: 不規則的)
Approach or withdrawal	食べもの, 人, 場所, おもちゃ, やり方など, 何であれ新しい刺激パターンに対する最初の反応を記述するカテゴリーである。(1: 接近的, 6: 回避的)
Adaptability	新場面または状況の変化に対する最初の反応が社会的に好ましい方向へ「変化しやすいか, し難いか」である。最初の反応は回避的であるにせよ, すぐになれるなら「慣れ易い」ということである。(1: 順応的, 6: なれにくい)
Intensity of reaction	ここでは反応のエネルギーが問題なのであって, その方向ではない。泣く反応にも笑う反応にも同じ程度の強さというものがあり得る。激しく泣くのも小躍りして喜ぶのも共に強い反応である。(1: 弱い, 6: 強い)
Quality of mood	嬉しい, 楽しいなどの親和的な行動の量と, 不愉快な, 泣くなどの親和的でない行動の量を比較して, どちらが多いかを記述するためのものである。(1: 機嫌がよい, 6: 機嫌が悪い)
Attention span and persistence	注意の持続とは特定の活動が時間的にどれほど長続きするかであり, 固執性とは特定の活動が何かに邪魔されても変わらずに続けられる程度である。いずれも活動の方向の決定および一旦決定された方向を変化させることの難しさについていう。遊びに終わりにしなさいといわれても止めないのは固執的である。(1: 持続的, 6: 持続的でない)
Distractibility	いま進行中の行動の方向を変更させるのに, またはそれを中断させるのに, 外からの刺激がどれほど有効かを表す。例えばコンセントの方に這い進んでいる子におもちゃを見せて, 進む方向が変わったとしたら, 気が散りやすいことになる。(1: 散漫的でない, 6: 散漫的)
Threshold of responsiveness	反応の閾値とも言われ, 反応を惹き出すのに要する刺激レベルのことである。この場合, 引き出される反応が接近か退避か, 強い弱いかは問題ではない。トーマスたちは刺激閾のほかに弁別閾をもこのカテゴリーに含める。例えば, 母の服装や髪型の変化にすぐ気がつくのは敏感な子である。(1: 閾値が高い・敏感ではない, 6: 閾値が低い・敏感である)

表2 気質類型(庄司, 1988)

Easy	機嫌はよく, 反応の表し方は穏やかで, 生理的機能の周期は規則的で, 初めての事態にも積極的に反応し, 環境の変化にも慣れ易いという特徴をもっている。
Difficult	生理的機能の周期は不規則で, 反応を強く表し, 初めての事態では消極的でしり込みしがちであり, 環境の変化には慣れにくく, 機嫌の悪いことが多い。
Slow to warm up	初めての事態では消極的でしり込みしがちで, 環境の変化にもなれにくいだが, 反応は穏やかで活動性は低い。
Intermediate-high	周期性が不規則な傾向, 消極的でなれにくい傾向; 反応も強い傾向, 機嫌も悪い傾向にある。
Intermediate-low	上記のどの条件にもあてはまらない, 特徴をもっていない普通の子。

規則性・接近／退避・順応性・反応の強さ・気分の質の5つのカテゴリースコアによって個人の気質類型を診断する(時間のかかる子どものみ, 活動性も関与する)。

表3 対象児童カテゴリー値

	Activity	Rhythm	App/ With**	Adapt**	Intens**	Mood	Persist**	Distract**	Thresh**
対象児童	3.55 (0.64)	2.83 (0.57)	3.42 (0.77)	3.54 (0.62)	4.14 (0.70)	3.25 (0.58)	3.40 (0.69)	3.31 (0.59)	3.42 (0.51)
標準値	3.56 (0.75)	2.75 (0.68)	2.99 (0.94)	2.55 (0.72)	4.52 (0.65)	3.31 (0.68)	2.87 (0.69)	3.89 (0.81)	3.98 (0.60)

( )内は標準偏差を表す \*\*p<.01

表4 気質類型内訳

	Easy	Diff	STWU	I-L	I-H	合計
対象児童(%)	34(13.9)	30(12.2)	73(29.8)	75(30.6)	33(13.5)	245(100.0)

表5 措置理由別カテゴリー値

	Activity	Rhythm	App/With	Adapt	Intens	Mood	Persist	Distract	Thresh
虐待 N= 60	3.57 (0.68)	2.89 (0.61)	3.29 (0.81)	3.55 (0.70)	4.09 (0.71)	3.13 (0.57)	3.46 (0.79)	3.25 (0.66)	3.45 (0.56)
非虐待 N=185	3.56 (0.68)	2.81 (0.56)	3.46 (0.75)	3.53 (0.60)	4.15 (0.70)	3.29 (0.58)	3.41 (0.66)	3.33 (0.57)	3.39 (0.50)

( )内は標準偏差を表す

表6 措置理由別気質類型

	EASY	DIFF	STWU	I-L	I-H	合計
虐待児 (%)	6 ( 2.5)	8 ( 3.3)	15 ( 6.1)	24 ( 9.8)	7 ( 2.9)	60 (24.5)
非虐待児 (%)	28 (11.4)	22 ( 0.9)	58 (23.7)	51 (20.8)	26 (10.6)	185 (75.5)
合計 (%)	34 (13.9)	30 (12.2)	73 (29.8)	75 (30.6)	33 (13.5)	245 (100)

例で24.5%を占め、非虐待は185例で75.5%であった。

虐待児と非虐待児との各カテゴリー値は表5に、気質類型は表6に示した。

措置理由別による、各カテゴリー値間および、気質類型間に統計的な有意差は認められなかった。

4) 入所期間別による気質類型と気質特徴について  
(未記入10例除く)

入所期間別の各カテゴリー値は表7に、気質類型は表8に示した。

入所期間別による、各カテゴリー値間および、

気質類型間に統計的な有意差は認められなかった。

Ⅳ. 考 察

本研究では、1) 児童養護施設入所児童の気質特徴と気質類型について、2) 措置理由別による気質特徴と気質類型について、3) 入所期間別による気質特徴と気質類型について検討し、児童養護施設という通常の家とは異なる環境下で生活する子どもの理解を深め、成長・発達を支援するための一方策を探ることを目的としている。これらについて、順に検討していく。

1) 児童養護施設入所児童の気質特徴と気質類型について

気質カテゴリーの検討では、9カテゴリー中6カテゴリーに標準値との間に差が認められた。このことは、養護施設入所児童特有の気質特徴を示している。つまり、児童養護施設で生活する子どもの気質特徴は、新しいものに対し

表 7 入所期間別カテゴリー値（未記入10名は削除）

	Activity	Rhythm	App/With	Adapt	Intens	Mood	Persist	Distract	Thresh
0～11M N=72	3.62 (0.65)	2.86 (0.57)	3.44 (0.81)	3.39 (0.64)	4.05 (0.67)	3.19 (0.63)	3.56 (0.86)	3.38 (0.62)	3.42 (0.58)
12～23M N=56	3.51 (0.57)	2.87 (0.68)	3.39 (0.79)	3.52 (0.50)	4.12 (0.72)	3.22 (0.57)	3.39 (0.58)	3.29 (0.58)	3.36 (0.54)
24～35M N=43	3.70 (0.77)	2.79 (0.55)	3.26 (0.7)	3.44 (0.62)	4.27 (0.73)	3.27 (0.52)	3.29 (0.66)	3.37 (0.57)	3.45 (0.51)
36～47M N=33	3.38 (0.58)	2.89 (0.49)	3.49 (0.72)	3.76 (0.61)	4.24 (0.64)	3.33 (0.62)	3.42 (0.61)	3.19 (0.66)	3.42 (0.36)
48～59M N=19	3.38 (0.65)	2.80 (0.46)	3.55 (0.79)	3.78 (0.59)	4.16 (0.69)	3.36 (0.48)	3.34 (0.67)	3.33 (0.54)	3.48 (0.47)
60M～ N=12	3.62 (0.80)	2.62 (0.49)	3.45 (0.77)	3.73 (0.77)	4.27 (0.68)	3.48 (0.54)	3.46 (0.59)	3.19 (0.45)	3.12 (0.44)

( ) 内はSDを表す

表 8 入所期間別気質類型

	EASY	DIFF	STWU	I-H	I-L	合計
0～11M(%)	14( 6.0)	6( 2.6)	18( 7.7)	11( 4.7)	23( 9.8)	72( 30.6)
12～23M(%)	8( 3.4)	7( 3.0)	20( 8.5)	7( 3.0)	14( 6.0)	56( 23.8)
24～35M(%)	5( 2.1)	8( 3.4)	11( 4.7)	5( 2.1)	14( 6.0)	43( 18.3)
36～47M(%)	3( 1.3)	4( 1.7)	11( 4.7)	4( 1.7)	11( 4.7)	33( 14.0)
48～59M(%)	2( 0.8)	2( 0.8)	7( 3.0)	2( 0.8)	6( 2.5)	19( 8.1)
60～ (%)	1( 0.4)	2( 0.8)	6( 2.5)	2( 0.8)	1( 0.4)	12( 5.1)
合 計(%)	33(14.0)	29(12.3)	73(31.1)	31(13.2)	69(29.4)	235(100)

て回避的で、新しい環境に慣れにくく（社会的に好ましい方向に変化しにくく）、自己表現の仕方が弱く、注意を向ける幅が狭く長続きしにくく、物事にこだわりやすく、反応の閾値が高い（敏感でない）と言える。

入所児童全体の気質類型は、先行研究とは異なっていた。Thomas & Chessらの30年以上に渡る縦断研究結果の中では、「Easy」は約40%、「Diff」は約10%、「STWU」は約15%の分布を示しており<sup>5)</sup>、佐藤ら（1987）のデータでは、気質類型は、「Easy」が最も多く40%程度、「Diff」が10%程度、「STWU」は10%以下、「I-H」は10～15%、「I-L」は30%程度であるとされている<sup>10)</sup>。副田ら（1990）の3～7歳児の調査では、「Easy」は5歳で45.9%、6歳で39.4%、7歳で36.9%、「Diff」は12.8%、12.8%、13.6%、「STWU」は5.2%、5.0%、4.9%であったと報

告されている<sup>11)</sup>。本研究結果の割合は、これらの研究結果とは異なり、「I-L」と「STWU」とで全体の60%を占め、一般的に最も多いとされる「Easy」は14%にすぎない。児童養護施設入所児童の気質は、「Easy」の割合が低く、「STWU」の割合が高いという結果が導き出された。

2) 措置理由別による気質特徴と気質類型について  
子どもの気質と養育者の養育態度や育児ストレス等の間には、ある種の相関関係があるということが、わが国における子どもの気質の先行研究でも明らかにされている<sup>12)～15)</sup>。ゆえに、子どもの気質は養育者との関係に影響すると考えられる。このことを、虐待現象は子どもと養育者との関係性の問題であるという観点で捉え、「①措置理由が虐待となっている児童とそ

れ以外の児童との気質特徴および、気質類型には差異が見られ、②虐待入所児童の気質類型は非虐待入所児童に比べて「Diff」が多いのではないか」という仮説をたてて検討したが、今回の結果からは差異は認められなかった。

しかしながら、児童養護施設入所児童全体に気質特徴が見られ、気質類型には、「STWU」の児童の割合が高い傾向にあるという点から考察すると以下のような知見が得られた。

「STWU」と判断される条件は、“①App/With, Adapt, Moodが基準値を超えていること、そしてActivityとIntensは基準値を超えないこと、②App/With, またはAdaptの得点が基準値よりも+1.0標準偏差以上大きい場合は、Activityが基準値より1/2標準偏差値まで上がっていても、また、Moodが基準値より1/2標準値まで下がっていても「STWU」とみなす”<sup>16)</sup>ということの2種を含んでいる(表9)。

「Diff」と判断される条件は、“Rhythm, App/With, Adapt, Intens, Moodの5個のカテゴリー得点のうち、4個以上が基準値を超えていること。しかもその4つの中に「Intens」の得点が必ず含まれていること。さらに5つのカテゴリー得点中には基準値よりも標準偏差+1を超える値が2つ以上あること”<sup>16)</sup>とされている(表9)。

このことから、「STWU」の範疇に入る子どもの中でも、②の条件の子どもは、「Intens」のカテゴリー以外では、「Diff」により近い特徴を示していると言える。

児童養護施設入所児童の「STWU」の範疇に

属している、73名中71名が前述している②の条件で「STWU」と判断された子どもたちであった。つまり、児童養護施設入所児童は気質カテゴリーにおけるApp/With・Adaptによって、「Diff」により近い特徴を示している子どもたちの割合が高いと言える。

われわれの仮説は支持されなかったが、児童養護施設入所児童の全体の傾向として、「Diff」により近い特徴を示している「STWU」の割合が高い傾向にあるという結果は、今後、注目すべき点であると言える。

また、先行研究の中で「STWU」について取り上げられているものは見当たらず、そのほとんどが「Diff」を中心に養育者の養育態度との関係や後の子どもの問題行動について述べられている。今回の研究結果から「Diff」に加えて、「STWU」をさらに2つのタイプに分類すること、つまり、子どもの成長・発達において、気質特徴の“App/With”“Adapt”について検討を加えていくことが重要かつ必要であることが示唆された。

3) 入所期間別による気質類型と気質特徴について  
一般的に、施設生活の長さが子どもの成長・発達に悪影響を及ぼしているのではないかと考えられがちである。施設職員の、「養護施設で生活している期間の長さが行動特徴に影響を及ぼしているのではないか」という意見により、入所期間別による気質類型と気質特徴の比較を行った。その結果、差異は認められなかった。入所期間の長さによって、気質特徴に差異がな

表9 Slow to warm up childとDifficult childの下位項目

	Active	Rhythm	App/with	Adaptation	Intensity	Mood
Slow to warm up child①	Lowな傾向		Withdrawalな傾向	Non-Adaptabilityな傾向	Mildな傾向	Negativeな傾向
Slow to warm up child②	ある程度Highな傾向であっても可		Withdrawalな傾向 どちらかが標準偏差+1.0超えていること。	Non-Adaptabilityな傾向		ある程度Positiveな傾向であっても可
Difficult child		Arrhythmな傾向	Withdrawalな傾向	Non-Adaptabilityな傾向	Intensityな傾向	Negativeな傾向
これらのうちで標準偏差を+1.0超えるものが2つ以上あること。Intensを必ず含む。						



いということは、環境要因から子どもの成長・発達を理解しようとし、支援していくのではなく、子ども側の要因、すなわち、子どもの気質特徴を理解しながら、環境調整を行っていく視点が必要であろう。

## V. ま と め

本研究において、1) 児童養護施設入所児童の気質特徴と気質類型について、2) 措置理由別による気質特徴と気質類型について、3) 入所期間別による気質特徴と気質類型について検討を行った結果、児童養護施設入所児童は、措置理由や入所期間の長さには関係なく、一定の気質特徴が認められ、「Easy」の割合が低く、「STWU」の割合が高いことが明らかになった。特に、気質カテゴリー、App/Withでは回避的であること、Adaptではなれにくいことが特徴的である。このことは、新奇な人・ものや場面に対して回避的でなれるのに時間がかかり、社会的に好ましい方向へ変化しにくい気質特徴であることを指し示している。児童養護施設入所児童は、家庭とは異なる環境で日常生活を営んでいる。さらに、措置変更により、子どもの気持ちに寄り添えない形で生活の場が変容するケースや施設での養育者である担当職員が変わることも稀ではない。

われわれは、児童養護施設入所児童の成長・発達を支援していく上で、新奇な人・ものや場面に対して回避的で慣れるのに時間がかかり、社会的に好ましい方向へ変化しにくい気質特徴を持つ子どもたちが、生活の場の変容や養育者の入れ替わりを経験しながら成長・発達を遂げていることを理解しておかなければならないであろう。

今後、一定の気質特徴を持つ児童養護施設入所児童と養育環境の関係性に着目し、児童養護の現場との連携を取りながら、本研究を継続し、児童養護施設入所児童の成長・発達について研鑽を重ねていきたい。

## 謝 辞

本研究調査にご協力頂きました兵庫県児童養護連絡協議会ならびに児童指導員の先生方に深謝致します。

なお、本論文は、第48回日本小児保健学会(2001年11月、東京)、第49回日本小児保健学会(2002年10月、神戸)で発表したものである。

本研究は、甲南女子大学大学院高度化推進特別研究費の助成を受けた。

## 文 献

- 1) 稲垣由子, 戸松玲子. 2. 気質調査. 児童養護施設入所児童の心身健康調査報告書(兵庫県, 兵庫県児童養護連絡協議会) 2002: 9-27.
- 2) 森 茂起. 1. 調査実施の背景・目的. 児童養護施設入所児童の心身健康調査報告書(兵庫県, 兵庫県児童養護連絡協議会) 2002: 1-7.
- 3) Thomas A, Chess S. The Dynamics of Psychological Development. New York: Bruner/Mazel, 1980 (林雅次監訳. 子どもの気質と心理的発達. 東京: 星和書店, 1981).
- 4) 庄司順一. 子どもの気質に関する研究(3) —NYLSにおける「気質」概念の検討—. 日本子ども家庭総合研究所紀要 1997: 183-187.
- 5) Stella Chess and Alexander Thomas. Temperament-Theory and practice. Bruner/Mazel, New York, 1996, P.23-30.
- 6) Stella Chess and Alexander Thomas. GOODNESS OF FIT: Clinical Applications From Infancy Through Adult Life. Bruner/Mazel, New York, 1999, P.3-9.
- 7) 三宅和夫『子どもの個性—生後2年間を中心に—』, 東京大学出版会, 1990, P.46.
- 8) 佐藤俊昭 「子どもの気質の追跡研究—序報—」, 東北大学教養部紀要第43号, 1985, P.157-P.158.
- 9) 庄司順一『別冊 発達8: 発達検査と発達援助: IV 気質の評価』, ミネルヴァ書房, 1988, P.130.
- 10) 佐藤俊昭, 川添良幸, 仁平義明. 子どもの気質の追跡研究—第1報: 仙台とその近郊のゼロ歳児の気質—. 東北大学教養部紀要 1987; 47: 138-159.
- 11) 副田敦裕, 庄司順一, 前川喜平. 3~7歳児用行動様式質問紙の本邦における使用試み. 第37回日本小児保健学会講演集 1990; 266-267.
- 12) 高岸由香, 宅見晃子, 稲垣由子, 中村 肇「幼児の自律機能・行動上の問題・気質と親の養育態度の関係」, 小児の精神と神経第36巻第4号,

- 1996, P323.
- 13) 水野里恵「乳児期の子供の気質・母親の分離不安と後の育児ストレスとの関連：第1子を対象にした乳児期の縦断研究」, 発達心理学研究第9巻第1号, 1998, P.63.
- 14) 斉藤早香枝「子どもの気質に関する母親の認識と母子愛着関係」, 北海道大学医療技術短期大学部紀要11号, 1998, P.22-P.23.
- 15) 宮本信也, 山中恵子, 渋谷典子「小児の気質と母親の養育態度—4か月における検討—」, 安田生命社会事業団研究助成論文集25, 1989, P.121.
- 16) 古田俊文男, 気質的に「DIFFICULT」な子どもをめぐる諸問題, 宮城学院女子大学研究論文集1986; 64: 87-103.

## 書 評

### R-BOOK 2003 — 小児感染症の手引き —

編 集：米国小児科学会 感染症委員会  
 監 修：岡部 信彦  
 出版・販売：(株)日本小児医事出版社

判 型：A 5 変型判  
 総 頁 数：923頁  
 定 価：10,500円（本体10,000円＋税）

本書は、アメリカ小児科学会発行のRed Bookの日本語翻訳版である。Red Bookは小児科、特に感染症を専門にしているものにとってはバイブルのような存在である。

本書の内容は、必ずしも感染症の専門家向けではなく、小児の診療、保健、予防などに携わる人すべてに向いている。ごく日常的な感染症の診断、治療に必要なことから、臨床の現場での対策（たとえば、隔離、登校、予防法）、地域全体の対策まで網羅されているからである。また、米国と日本で事情が異なる場合には、日本の実情についても触れられている。

構成として、Section 1「能動免疫と受動免疫」は総論的に予防接種とγグロブリンを紹介し、免疫不全など特定の臨床的状況における予防接種についても述べている。Section 2「特殊状況下における小児のケア」では、生物テロ、輸血由来感染の危険性の減少、母乳、家庭外で保育される小児などのケアが紹介されている。Section 3「感染症のまとめ」は、現在の日本では一般的には見られない、しかし、いつ海外から輸入されたり問題になるかわからない感染症も含めて、各種の感染症をかなり詳細に紹介し、本書の半分以上を占めている。Section 4「抗菌薬および抗菌薬療法」では、抗菌薬の適正使用の原則、また個々の抗菌薬、抗真菌薬、抗ウィルス薬、寄生虫感染に対する薬剤が述べられている。Section 5「抗菌薬予防投与」では小児の術後患者等も含めて書かれている。そして、付録としてDirectory of Resources等が付いている。

(国立成育医療センター研究所成育政策科学研究部長 加藤 忠明)